伊勢平野中部臨海部における縄文時代以降の遺跡立地
－津波のリスクと居住場所との関係－
Archaeological Site Location after *Jomon* Period in the Middle *Ise* Alluvial Coastal Plain, *Mie*, Japan
－Relation between Tsunami Risk and Settlements Location－

河角　龍典*
Tatsunori KAWASUMI

1.　はじめに

本研究の目的は、津波襲来地域における沖積低地の居住地選択の特徴を地形環境と遺跡立地の関係から検討することにある。研究対象地域としては、伊勢平野中部の臨海部（三重県津市）を設定した。

伊勢平野中部の臨海部には中世の港湾都市である安濃津が位置していた。中世安濃津は、博多、堺と並び中世の日本三津と呼ばれ、国内の主要な港湾都市であった。この安濃津は、明応東海地震（1498 年）に伴う津波によって壊滅的な被害を受けた[1)]。伊勢湾西岸地域は、明応東海地震による津波以外にも、宝永地震（1707 年）による津波被害、安政東海地震（1854 年）による津波被害も受けた。宝永地震津波においては、津城下町およびその周辺において津波が平均海面上 2～3.9m に達したことが明らかにされた[2)]。他方、安政東海地震津波においては、津城下町（津市）において津波が平均海面上 3～3.5m に達し、津城下町における浸水深が地表面上 1m ほどになったことが明らかにされた[3)]。また、それらと比較して規模は小さいが、1944 年に発生した東南海地震の時にも、1m 程度の津波高があった[4)]。

以上のように伊勢平野中部においても津波が頻繁に襲来しているが、このような災害履歴を有する地域においてどのような居住環境が選好され、集落が形成されてきたか、十分に検討されているとは言えない。本研究では、伊勢平野中部における縄文時代以降の遺跡立地について、主に地形環境との関係から考察し、長いタイムスケールでの臨海低地への居住史の復原を試みる。

2.　研究方法

本研究では、研究対象地域における微地形を可視化することと遺跡 GIS データベースを構築することが研究の前提として必要となる。遺跡 GIS データベースの構築に限定されず地形環境の検討においても GIS を用いて表示や分析を行う。現在の地形環境を把握するために、国土地理院から提供されている基盤地図情報の数値標高モデル（5m メッシュ）と土地条件図を利用した。とくに 5m メッシュの数値標高モデルは 2012 年度に初めて公開された情報であるため、これまでの研究対象地域に関連する地形研究や遺跡立地研究では、使用されたことが無い新しいデータである。

＊立命館大学文学部准教授

遺跡立地を把握するために、本報告では、2012 年発行津市教育委員会発行の『三重県津市遺跡地図』[5)]を使用した。この遺跡地図に関するデジタルデータは公開されていないため、本研究では GIS を活用し遺跡地図および遺跡台帳のデジタル化を行った。今回のデータベースの構築範囲は、図 1 の緑色で示された範囲であり、その中には 47 枚の図幅が含まれる。遺跡地図については、地図の四隅に記された座標値（平面直角座標系第 6 系）をもとにジオリファレンスを行い、それぞれ適切な位置に配置してから、個々の遺跡の領域についてトレースの作業を行った。トレースした遺跡数は 378 箇所であった（図 1）。台帳の情報に関しては、遺跡番号、遺跡種別、遺跡の時代に関する情報を手作業で入力していった。なお、本報告で使用した GIS ソフトは、ESRI 社の ArcGIS10 である。

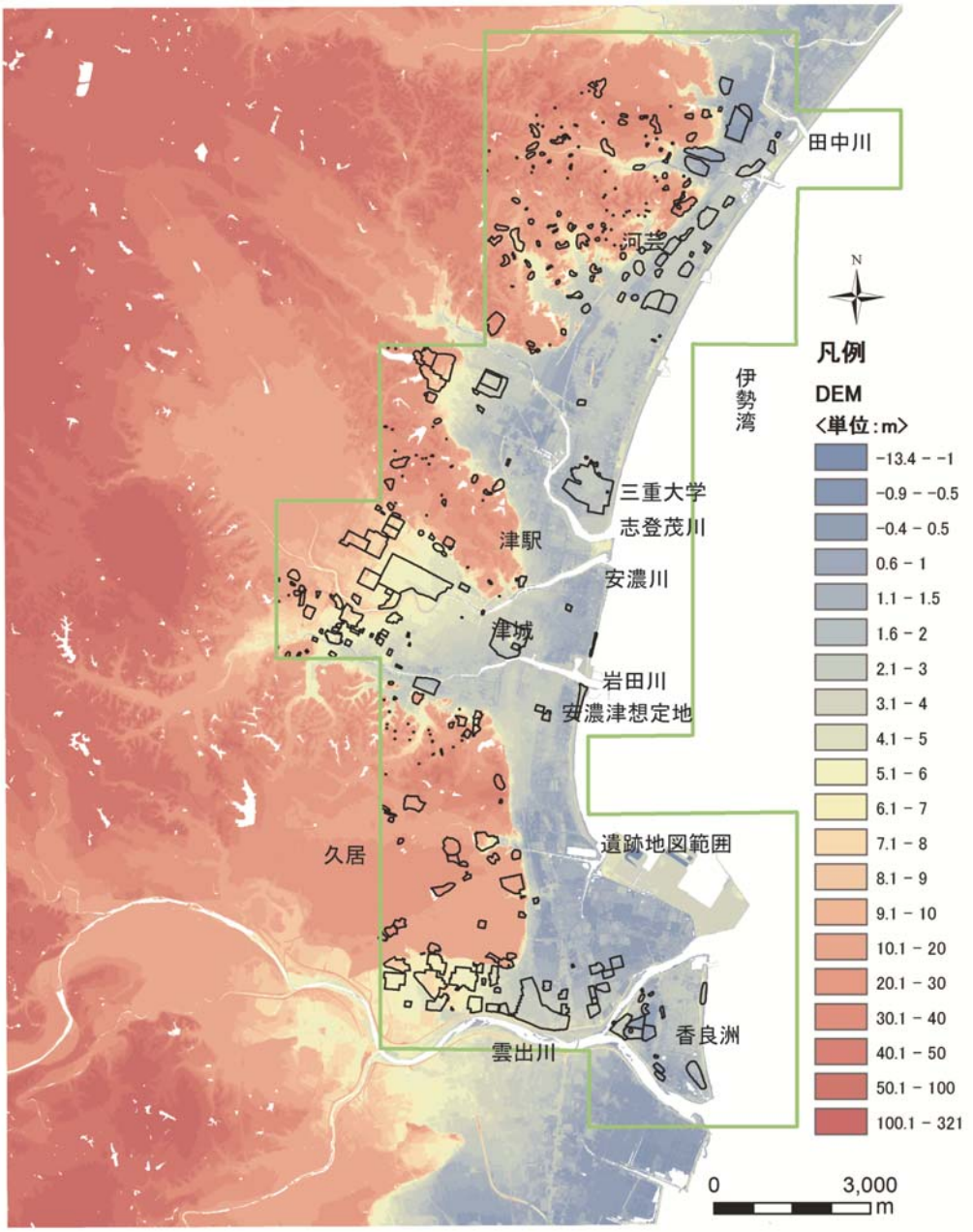

図 1　地域概観図

（地形データは国土地理院『基盤地図情報数値標高モデル 5m メッシュ』を使用。
遺跡の範囲は、『三重県津市遺跡地図』による。）

3. 研究対象地域の地形

研究対象地域には、雲出川、岩田川、安濃川、志登茂川、田中川など複数の河川によって形成された三角州が発達し、雲津川と岩田川の間、志登茂川と田中川の間には複数列の砂堆と堤間湿地がみられる(図 1、2)。

図1に示した 5m メッシュの DEM によって、低地の微起伏の可視化が可能となった。地図上の水色～青色の地域の多くは、標高 5m 以下の沖積低地である。やや濃い青色で示される標高 1m 以下の地域は、雲津川や安濃川など三角州が発達する河川の最下流域に分布し、志登茂川流域、田中川流域においては砂堆の背後の後背湿地に分布している。こうした低地は河川に近いこともあり、河川の洪水氾濫や津波による浸水リスクの高い地形である。他方、クリーム色から赤色で示される地域は、標高 5m 以上の地域である。その中には、主に山地や丘陵、段丘の他、河川に近接する地域では扇状地や自然堤防地帯も含まれる。

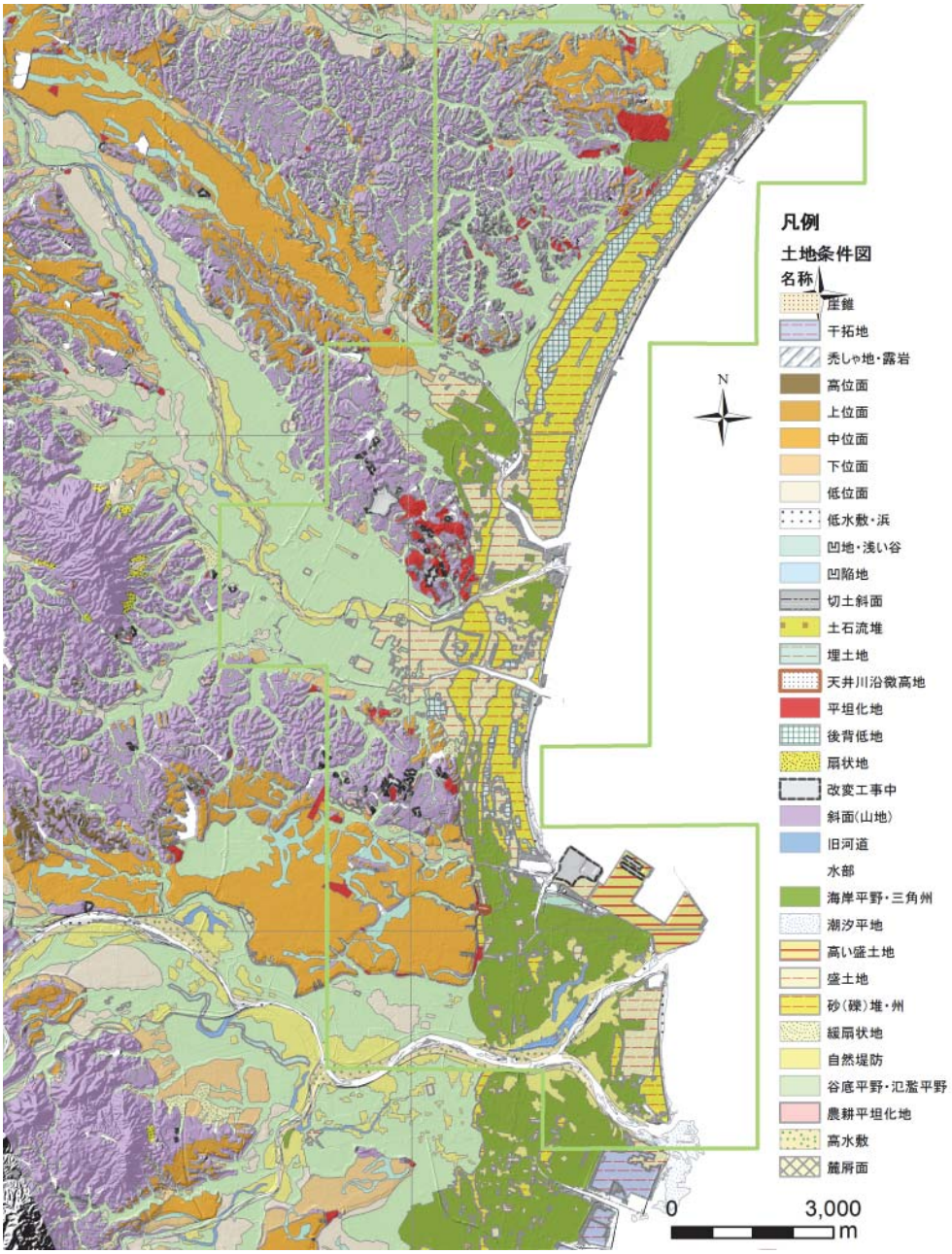

図 2 地形分類図(国土地理院『土地条件図』より作成)

4.　伊勢平野中部臨海部における縄文時代以降の遺跡立地

本章では、縄文時代から近世までを 5 時期に区分し、遺跡立地と地形環境の関係について考察した。遺跡の時代区分は、基本的に『三重県津市遺跡地図』の各遺跡の時代区分の情報に基づいている。具体的には、縄文時代、弥生時代、古墳時代、古代（飛鳥・奈良・平安）、中世（鎌倉・南北朝・室町）、近世（江戸）に区分して、それぞれの時代の遺跡分布状況を地図化した。より厳密な遺跡の盛衰や動態について検討するには、さら時代を細分しなければならないが、資料的な制約も踏まえて、本研究では大局的な流れを把握していく。

遺跡指定範囲の分布図（図 1）を見ると、とくに臨海部に関しては、遺跡が密集する地域と疎らもしくはほとんど存在しない地域に明瞭に区分できる。とりわけ、北部の河芸地区（旧河芸町）や南部の香良洲地区（旧香良洲町）は、それらの間にある旧津市に比べ遺跡に指定されている場所が多い。この分布密度の地域的差異は、旧行政界を境に明瞭に区分できることから遺跡そのものの密度の差ではないと考えられる。

縄文時代：海岸平野や三角州には遺跡の立地が 1 ヶ所を除き見られず、ほとんどは段丘面や河川沿いの沖積低地の扇状地帯、自然堤防帯に分布している。より厳密に遺跡立地について検討するのであれば、縄文時代以降に生じた地形変化について加味する必要がある。河芸町付近の海岸低地では、陸から 2 列目の砂堆が 3000 年前頃から形成されていることが判明しており[6)]、縄文時代には海岸線がそれよりも内側に存在したと想定できる。

弥生時代：縄文時代に比べると沖積低地に立地する遺跡が増加している。雲出川や安濃川低地においては、扇状地帯から自然堤防帯へかけての立地が進んだ。洪水リスクの高い沖積低地への進出は稲作と関連することが予想される。三重大学付近の遺跡のように海岸低地の砂堆や堤間湿地における遺跡立地も、この時期に開始している。

古墳時代：沖積低地への進出がより活発となる。雲出川では三角州帯（香良洲付近）においても遺跡の立地がみられるようになる。河芸付近の海岸低地の砂堆でも遺跡数が増加し、田中川下流域の後背湿地にも活動が広がっている。このようなより海岸に近接する土地での生業としては、漁労や製塩、稲作等が想定される。この時期には、低地に限らず丘陵や段丘での開発も進行し、多数の古墳が築造されるようになる。遺跡数の急増は、この古墳の築造によるものである。

古代：遺跡数は減少する。沖積低地での遺跡立地は、古墳時代と同様にみられる。伊勢平野の沖積低地では条里型地割が広い範囲でみられ分布していることから、そこでは水田開発が進行したと考えられる。他方、丘陵や段丘における遺跡はほとんどみられなくなっている。

中世：遺跡数は増加する。古代と同様に沖積低地における遺跡立地がみられる一方、丘陵地にも遺跡が再び分布するようになる。遺跡が丘陵地の開析谷付近に位置するものが多いことから、開析谷の開発との関連が推測される。

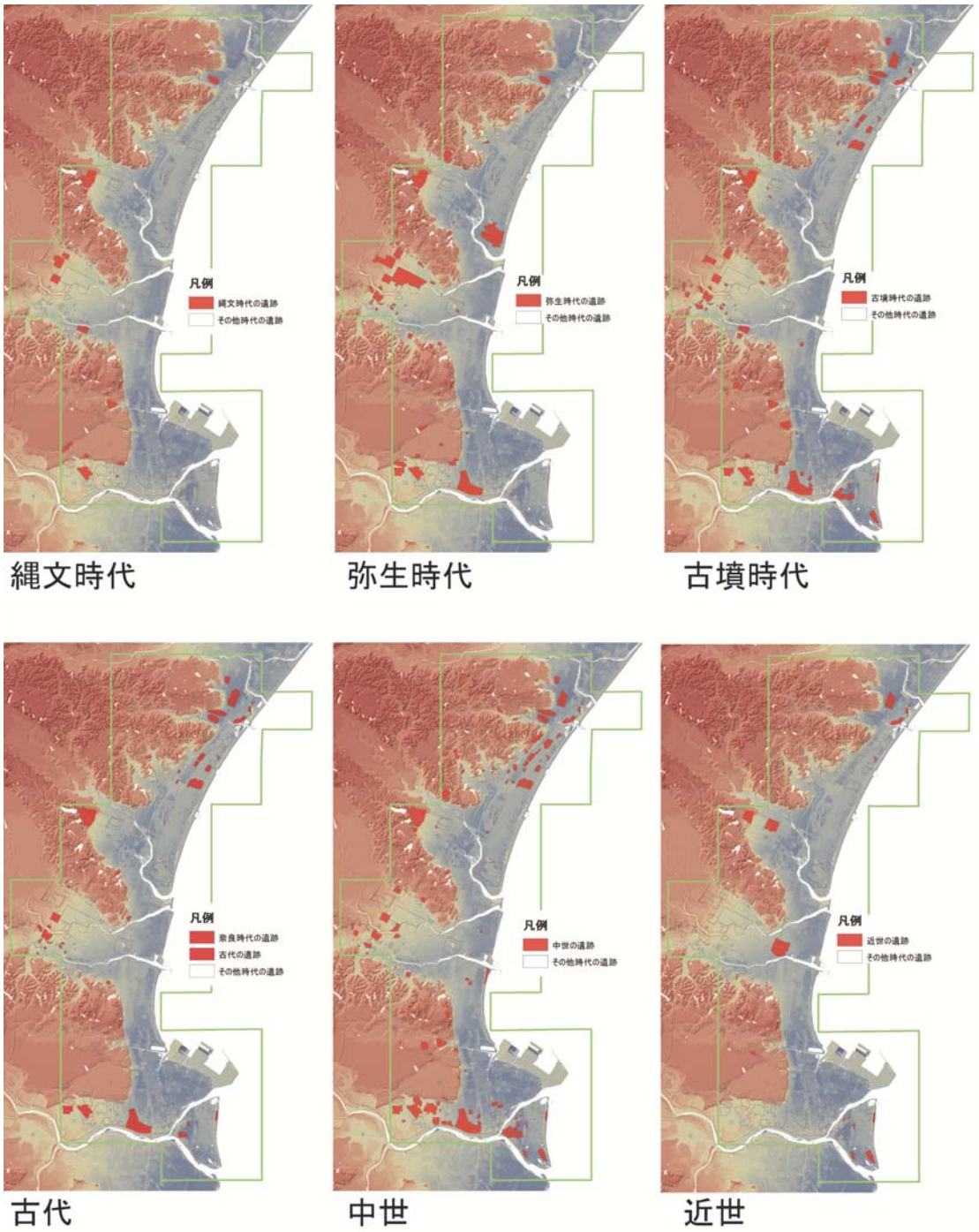

図 3　伊勢平野中部臨海部における縄文時代以降の遺跡立地

（『三重県津市遺跡地図』より作製）

近世：遺跡数は急減する。これは、年代が浅いため考古学の対象となる遺跡として認知されないものが多く、遺跡になるものが少ないためであると推定される。近世遺跡として認知されるものは、津城や専修寺の他、雲出川や田中川の河口に位置する遺跡である。

5.　おわりに

本報告では、伊勢平野中部における縄文時代以降の遺跡立地について、主に地形環境との関係から考察し、長いタイムスケールでの臨海低地における居住史の復原を試みた。

沖積低地での活動は縄文時代からみられるものの、沖積低地における顕著な集落立地は弥生時代以降となる。弥生時代は、河川の中下流域の扇状地帯から自然堤防地帯で進行する。弥生時代における臨海部の集落立地は遺跡地図を見る限り活発ではない。沖積低地では地下数 m に弥生遺跡が埋没していることもあるので、本研究対象地域の臨海部においても遺跡が無いとは現状では断定できない。

古墳時代以降になると臨海部の三角州や海岸平野への進出が著しくなり、臨海部の遺跡立地はその後、古代、中世にも続くことが確認できた。

本研究対象地域は、東海地震や東南海地震による津波が繰り返し来襲する地域にもかかわらず、古墳時代以降、臨海部において遺跡が立地することが明らかになった。津波を避けるために高台に居住するような痕跡は、本研究の時間分解能では確認することができなかった。

今回使用した遺跡地図のデータは非常に時間分解能が粗い情報であり、資料的な限界も存在する。今後は、既存の発掘調査成果を参照しつつ、時間分解能を向上させ、より詳細な遺跡の盛衰や動態を明らかにしていく必要がある。本研究対象地域の臨海部は、発掘調査件数が非常に少ない地域であり、ハンディジオスライサー等による地質調査も補完的に行い、遺跡立地の可能性を検討する必要もある。

参考文献

1)　①矢田俊文「1498 年明応東海地震の津波被害と中世安濃津の被災」、歴史地震 20、2005、9～12 頁。

②矢田俊文『中世の巨大地震』、吉川弘文館、2009、90～110 頁。

2) 羽鳥徳太郎「伊勢湾岸市街地における安政東海地震津波（1854）の浸水状況」、歴史地震 30、2005、57～64 頁。

3) 行谷佑一・都司嘉宣「宝永（1707）・安政東海（1854）地震津波の三重県における詳細津波浸水高分布」、歴史地震 20、2005、33～56 頁。

4) 前掲 2、57～64 頁。

5) 津市教育委員会編『三重県津市遺跡地図』、津市埋蔵文化財報告書 24、2011、347 頁。

6) 河角龍典・小野映介・高橋学「津波災害およびその復旧・復興過程に関する災害考古学的研究―伊勢平野中部における完新世後半の海岸低地の形成過程に関する調査報告―」、歴史都市防災研究―2011 年度　東日本大震災に関る研究推進プログラム研究成果報告書―、2012、41～44 頁。